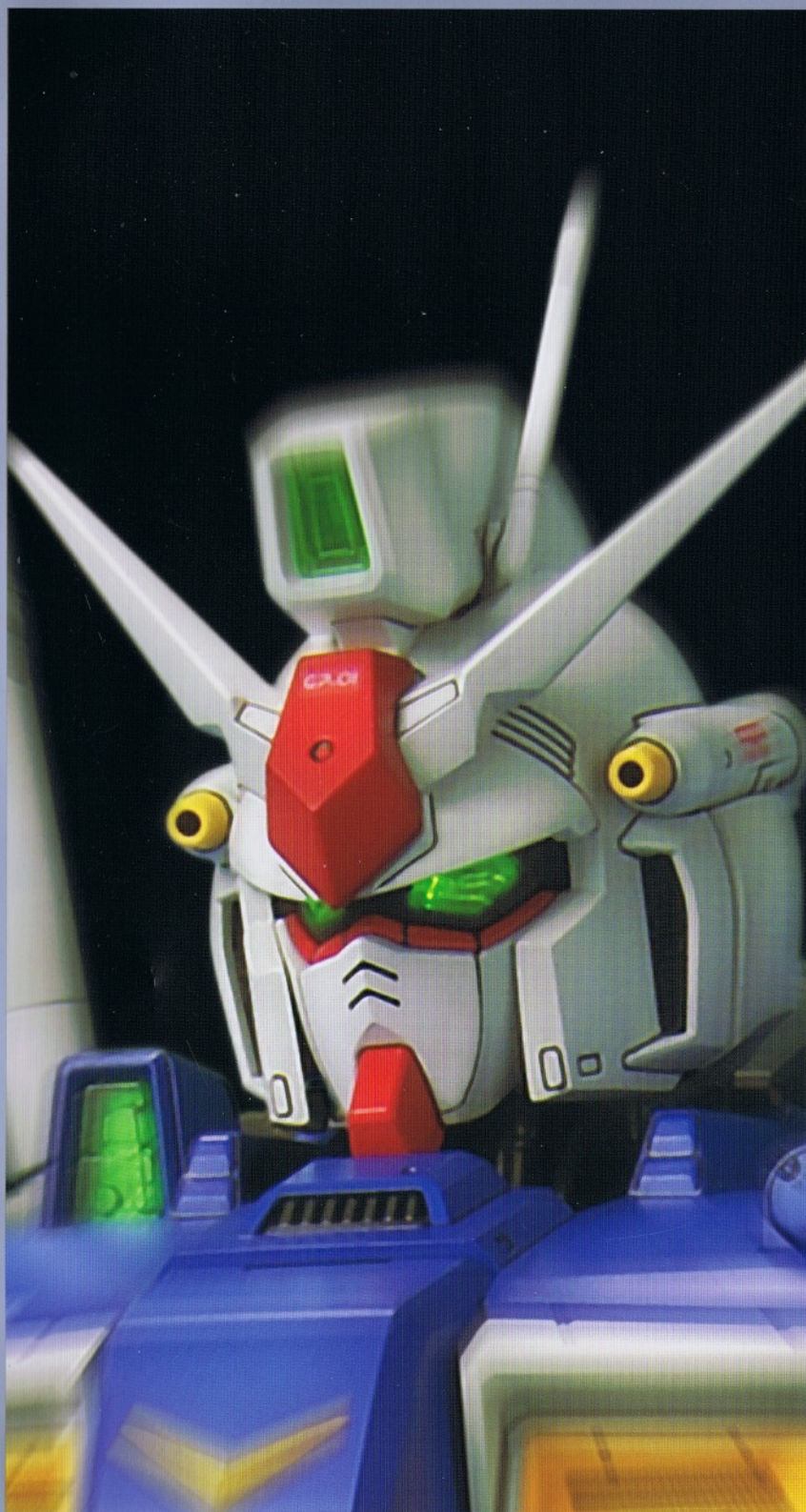


INSTRUCTION  
MANUAL



RX-78 GP01 GUNDAM GP01/Fb

RX-78 GP01

GUNDAM GP01/Fb

E.F.S.F. PROTOTYPE MULTIPURPOSE MOBILE SUIT



# M.S Machinery [機体解説]

## CHARACTERISTIC

RX-78 ガンダムGP01は、機体の外観のみならず、内部メカニズムも可能な限り再現。完成後もメンテナンスハッチ等の開閉が可能で、可動式シリンダー、バーニアズル等が露出。内部メカニズムも単なるディテールの再現だけでなく、パーツごとの連動した動きを再現。各部アーマー類の内側を彫刻でリアルに表現。



### HEAD PARTS

[頭部]

頭部カメラアイは、発光ダイオードにより点灯可能。



### COCKPIT

[コックピット]

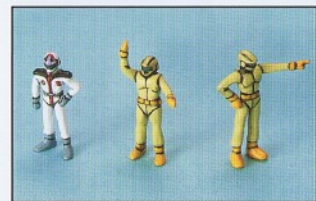
コックピット周りのハッチをはじめとする全身各所のメンテナンスハッチが開閉可能。



### MACHINE GUN

[マシンガン]

マシンガンは、各ブロックごとに分解可能。内部に精密なメカディテールを表現。



### FIGURE

[フィギュア]

パイロット、整備員などのフィギュアが付属。



### FULL BURNER

[フルバーニアン]

Fb(フルバーニアン)ユニットの装甲内部には、エンジンやパイプ等のディテールを表現。



### SHIELD

[シールド]

設定同様、シールド本体の伸縮構造を再現。ビーム・ライフルのエネルギーバックを2個装着可能。



### MACHINE GUN

[マシンガン]

## RX-78 GP01

ガンダム試作1号機 重力下仕様



### FULL HATCH OPEN

[フルハッチオープン]



### CORE FIGHTER

[コア・ファイターFF-XII]

2種類のコア・ファイターをセット。パーツの組み換えをしなくても再現が可能。コックピット部分をパイロットも併せてリアルに再現。



### BEAM RIFLE

[ビーム・ライフル]

フォアグリップ及びセンサーは可動式。エネルギーバックの脱着が可能。ジューテ作動状態の再現が可能。





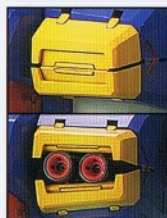
## RX-78 GP01/RX-78 GP01Fb

[フルバーニアン・コンバージョン仕様]

各パーツユニットを組みかえることでGP01からGP01Fb（フルバーニアン）に換装が可能。外したパーツは、メンテナンスハンガーに、飾ることができ、メンテナンス中のシーン再現が可能。

## "Full burnern" RX-78 GP01Fb

ガンダム試作1号機 宇宙戦仕様  
"フルバーニアン"



▲コア・ファイターFF-XII Fb



※写真の完成品は、塗装してあります。



# ガンダム試作1号機 重力下仕様

E.F.S.F. PROTOTYPE MULTIPURPOSE MOBILE SUIT RX-78 GP01 GUNDAM GP01/F6

U.C. (Universal Century=宇宙世紀) 0080年。ジオン公国が独立を掲げて地球連邦政府と戦った一年戦争※1は連邦軍の勝利に終わった。この戦争において初めて実戦に投入された“MS (モビルスーツ) ※2”は、既存の兵器体系を大きく塗り替え、戦略戦術から兵站に至るまで、戦争の在りようを根本的に覆してしまった。例えば「戦車」があるいは「航空機」が、ひいては「核兵器」がそうであったように、今後の“政治”“経済”および“軍事”にまつわる諸問題をMS抜きで考えることは不可能となってしまうのだ。戦争終結後、連邦軍はMSという兵器そのものの検証を行う必要に迫られていた。連邦軍による戦後のMS開発は、基本的には公国軍の技術を解析、咀嚼することに始まり、さらに吸収、融合、発展する段階に達していた。

U.C.0081年10月13日。連邦議会において、一年戦争の戦後処理の一環として「連邦軍再建計画※3」が可決された。それに伴い、各軍事拠点の再編も実施された。さらに、公国軍から接収した物資や施設などによって得た情報から、MSに関連する彼我の技術格差の是正におおよその目途が立った頃、MSの更なる高性能化を目指してひとつのプロジェクトが立案された。それが『ガンダム開発計画※4』である。この計画には、相当規模の公国軍残党が地球圏に潜伏、潜在する事実に対する保険としての意味もあったため、極秘裡に推進された。この計画は、公国軍とのMS関連技術の格差を是正するのみならず、連邦軍による安全保障体制を磐石のものとするための布石として計画されたものだった。

プロジェクトは「連邦軍再建計画」の一環として認可を受け、連邦軍のジョン・コーウェン中将管理のもと、U.C.0081年10月20日、A E社 (アナハイム・エレクトロニクス※5) において極秘裡にスタートした。計画の実施に先立ち、A E社は一年戦争時に建造されたMSの機能をいくつかの要素に分類した。そして、それぞれの機能分化と予測される進化のロードマップに基づいて数種類の設計案を提出し、検討期間を経て機体建造を開始した。

U.C.0083年9月29日。「ガンダム開発計画」に基づくMSのテストヘッドとして開発された複数の機体の内、“汎用型MS”として建造されたRX-78GP01“ガンダム試作1号機”がロールアウトした。GP01は、一年戦争時に優秀な戦績を残したRX-78“ガンダム※6”のコンセプトの継承と、さらなる高性能化を目標としていた。そのため、ガンダムが採用していたシステムの多くが盛り込まれている一方で、ガンダムが指標としていた“擬



レッグセンサーレンジ



人化※7”をさらに追及するという側面を持ち併せていた。実際、GP01はRX-78ガンダム以上に人間に近い動作を実現しており、これは連邦軍が独自に開発した技術と公国軍による技術融合が貢献していると言われている。GP01は実験機であるため、機体各所にセンサーなどが増設されており、RX-78に搭載されていたバランサーやセンサーはさらにブラッシュアップあるいは設計変更され、むき出しで仮設されている部分もある。これらのセンサー類と稼働ソフトの最適化により、GP01は周辺の状態を把握した上での動作も可能となり、より人間に近い運動や可動 (極端な言い方をすれば、それは“仕草”や“癖”に近い) が可能なように設計されている (この設計思想は、後に他の技術やコンセプトなども融合し発展することで、ムーバブル・フレーム※8へと昇華される)。開発当初のMSは、公国系の機体であろうと連邦系の機体であろうと、その機能を達成するだけで精いっぱいだったものが、産業としての裾野、あるいは工業製品としてのバックグラウンドが圧倒的に拡大したため、その関連技術は部品単位、部材レベルで急速に成熟

## 用語解説

※1 一年戦争  
U.C.0079年1月3日に勃発したジオン公国の独立戦争のこと。勃発から終戦に至るまでの期間が、およそ一年に及ぶことから後年こう呼ばれるようになった。

※2 モビルスーツ  
MSという名称は、Mobile Suit (Space Utility Instruments Tactical=戦術汎用宇宙兵器) という機体の機能に由来している。そして、MSはその名の通り、あらゆる戦術に対応する高い汎用性を示した。MSがほぼ現在に近い形を獲得したのは研究の開始から2年後のことで、MSの名を冠されるのもこの時であった。

※3 連邦軍再建計画  
これは、ジオン公国との戦争によって疲弊、消耗した軍組織の再編と、喪失した戦力や施設の復旧に加え、MSの出現によって抜本的な改革を余儀なくされた戦略、戦術の再構成をも含んでいた。当然、人員の補充や人事異動も大規模に実施された。実質的には、戦闘中の緊急人事や臨時担当官を正式に任命、追認するという側面が強かったと言われている。

※4 ガンダム開発計画  
一年戦争において驚異的な戦果をあげたガンダムよりさらに高性能な機体の開発計画。連邦軍のジョン・コーウェン中将主導のもと、A E社が中心となって行なわれた。この計画でロールアウトしたGPシリーズと呼ばれる機体は全部で3体 (4体ともいわれる)。諸事情によりこの計画は抹消され、GPシリーズは公式には存在しなかったことになっている。

※5 アナハイム・エレクトロニクス社  
A Eは、家電製品から軍用航空機まで生産する巨大企業であり、一年戦争当時、その影響力の大きさを公国軍でさえ接収を控えたほどの一大コングロメリットであった。また、戦後はいち早くMSの兵器としての優秀さに着目し、公国軍の主力MS生産メーカーであったジオニック社などを吸収合併することで、連邦軍を最大の顧客としながら、地球圏最大のMS開発生産能力を持つ軍需産業となった。







した。それにより、躯体内でのアクチュエーターのレイアウトの自由度やフレーム、接合部、可動部などの構造限界が飛躍的に改善されたのである。例えばGP01では、コア・ブロックの配置の変更に伴い、Aパーツ(上半身)のうち胸部モジュールに余剰容積がほとんど無くなっても、肩部の可動構造のほとんどを腕部モジュールに内装する事で他の機体と同等以上の機能の獲得を可能としている。



つまり、従来は肩関節のボディ側の構造が“腕を動かして”いたものが、“腕が自分で動く”ことが可能となったのである。無論、その機構を固定するための構造をボディ側に設ける必要はあるが、構造補強以外の内部機構は事実上不要となったのである。この構造そのものは“擬人化”に逆行するものだが、それは逆に“構造を真似る”ことなく“人間的な挙動”を真似ることが可能であったと言うことでもある。そういった“擬人化”への志向は機体各所に及んでおり、頭部も例外ではない。GP01の頭部は、RX-78と同様に頭頂部のメインカメラ部と一対のデュアルカメラ、そして2門のバルカン砲※9などが内装されている。この外観はガンダム系MSの特徴ともなっているが、試験機であるGP01にはさらにモニタリング用の装備が多数増設されている。メイン・コンピューターも基本的にはコア・ファイターに搭載されているが、頭部ユニットを副次的なコ・プロセッサフレームとするシステムも継承さ

**用語解説**

※6 ガンダム

連邦軍がジオン公国のザクに対抗するために開発したMS。型式番号はRX-78。全部で8機試作されたと言われている。一年戦争の勃発からおおよそ9か月後に実戦投入され、戦艦並みの破壊力を持つビーム・ライフルや、ザク・マシンガンでは歯が立たない堅牢な装甲など、連邦の工業力の粋を凝らして開発された。アムロ・レイが搭乗したRX-78-2が最も著名で、連邦系MSのフラッグシップ機となった。

※7 擬人化

人間でないものを、人間のように見立てること。例えば、機動兵器が正座したり真身を破らずに脚を割ったりできる必然性は必ずしもないのだが、技術研鑽上の目標としてしまったりすること、あるいは、外観上目に当たる部分にちょうどカメラがふたつあるデザインを施してしまうなど、自動車を正面から見ると、なんと顔に見えてしまう人間の認識能力にも要因があるらしい。

※8 ムーブブル・フレーム

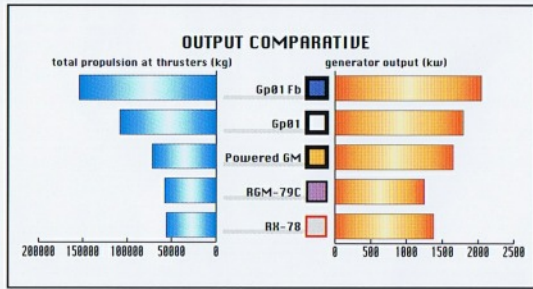
MSの構造に関するU.C.80年代中期以降に確立された新技術。可動内骨格とも呼ばれ、駆動系をマウントした内骨格構造をベースにして、その上を装甲板で覆っていくことでMSを構成するというものである。この技術の確立によって、後に全盛をむかえる可変MSの製作が可能となった。

※9 バルカン砲

宇宙世紀において、特にMSなどが装備する機関銃、あるいは機関砲類の総称として使用される俗称。本来は、円形に束ねられた数本の機関砲身が回転することで高速での連射(毎分4000~6000発程度)を可能とした兵器にメーカーが付けた商標。神話の火と鍛冶の神の名前に由来するらしい。

※10 コア・ブロック・システム

ガンダム、ガンキャノン、ガンタンクなどの中核モジュールで、コックピットと教育型コンピューター、メインジェネレーターなどを内装するブロック。戦闘機としても標準的な対空/対地・空間戦闘能力を持つ小型戦闘機コア・ファイターに変形し、非常時には脱出ポッドとしても機能する。パイロットおよび突撃データのサバイバリティを飛躍的に向上させる。



れている。ただし、これはコア・ファイターに搭載されるコンピューターの負担や開発コストなどを減らすことを可能とする一方で、機体各所に分散配置された各種センサーを統合制御する機能を機体自体に盛り込むことで、MSのさらなる“擬人化”を達成するというコンセプトのためであったようだ。パイロット及び戦闘データなどのサバイバリティを確保するため、コア・ブロック・システム※10も引き続き採用されている他、RX-78-2において問題となっていた腹部の構造的な脆弱さを補うため、従来のパーティカル(垂直)・イン・ザ・ボディ方式ではなく、ホリゾンタル(水平)・イン・ザ・ボディ方式が試験的に採用されている。コックピットブロックの移動方式などは既存のコア・ブロック・システムとほぼ同一だが、コア・ブロックとしての機能自体が見直され、変形やボディ内でのレイアウトが変更されている。この機体は、メイン・ジェネレーター及びメイン・スラスター、各種の操縦、管制機器のほとんどがコア・ファイターに搭載されているため、主機であるコア・ファイターを換装するだけで、空間戦闘から重力下まで適応可能となるよう想定されていた。無論、機体の各種アライメント調整やメンテナンスなどが必要で、諸領域に特化された専用機にはかなわないが、空間用装備も同時期に開発されていたため、追加装備による対応が可能であった。



換装メンテナンス時



# ガンダム試作1号機 宇宙戦仕様 "フルバーニアン"

## "Full burner"

E.F.S.F. PROTOTYPE MULTIPURPOSE MOBILE SUIT RX-78 GP01

GUNDAM GP01/Fb



肩部バーニアノズル



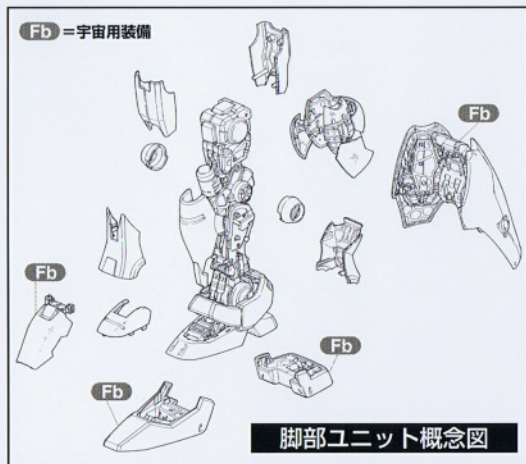
胸部バーニアノズル

RX-78GP01は、基本的には主機のコア・ファイターを換装するだけで“空間戦闘※11”にも対応可能なように設計されていた。そのためのパーツは、機体とほぼ同時にロールアウトしていた。GP01は、あくまでも稼働領域に対応した高性能化を目指しており、いわゆる“汎用型兵器”としての機能の追及を主な目的としていた。MSが稼働する領域は、基本的には地上（地球上）か宇宙空間（月面、コロニーを含む）かのいずれかである。そして、それぞれの領域で最高の性能を発揮できるように調整されたのがGP01であり、Fb（フルバーニアン）化は当初から予定されていた改装だったと言える。つまり、実際には、Fb化に必要な装備一式は、基本的にはドックル※12化されたもの

として検討されていた。つまり、コア・ファイターとショルダーアーマー、脚部ユニットなどを換装するだけで、空間戦闘に対応した仕様への変更が可能だったということだ。

しかし、同年10月31日、デラース・フリート※13との交戦によって機体が甚大な損傷を被ったせいで、同機は機体の修復と同時にFb化を行うこととなったため、大幅な設計変更を余儀なくされた。つまり、基本的には空間戦闘用の装備と重力下仕様の装備を換装するだけで済むはずだったものが、急遽変更されたということである。

同年11月2日。同機は修復と改装のためA E社のフォン・ブラウン※14工場に搬入されたが、同月4日にはトライアルを開始している。その日程は通常では考えられないほど破格に迅速なものだったが、これは、連邦軍の強い督促の他に、必要なパーツがすでに完成していたことと、開発担当者による不眠不休の尽力があって初めて可能となった奇跡だともいわれている。前述したように、この際に施された改装は、当初から予定されていたものとは大幅に異なっている。本来この機体の設計コンセプトは、いわゆる



### 用語解説

#### ※11 空間戦闘

“無重量”空間における戦闘のこと。宇宙空間での戦闘とほぼ同義だが、U.C.における人類の活動領域にはコロニーや月面など、宇宙空間でも“重量”が発生する場所があるため、それと区別する必要がある場合に特に使われる。地球上では“空気”や“地面”を機動のために利用できるが、宇宙空間では頻りにスラスターなどを使わなければ動くことも止まることもできない。

#### ※12 ドックル

「ドック (dock)」に「〜できる、…に適する」の意味の「-able」を付けた語。dock+ing で「ドッキング」などを使うように、追加または別パーツの着脱により機能の追加や変更が可能な機体などを指す。例えば、レンズと撮像管 (板) を持つ受像部はそのままで、スタジオ用の端子ユニットと取材用のVTRユニットが交換できるような放送用ビデオカメラなどを「ドックルタイプ」と言う。

#### ※13 デラース・フリート

旧ジオン公国軍において中将であったエギーユ・デラースを総帥とする公国軍残党組織のひとつ、一年戦争を生き延びたア・バオア・クーにおける戦闘の途上、崇敬するギレン総帥がキシリアに謀殺されたことを知るや、麾下の艦隊を糾合して戦線を離脱、潜伏し、暗黒宙域に保留基地“炎の園”設営。3年に及ぶ雄略を経て、「星の闘作戦」を敢行する。

#### ※14 フォン・ブラウン

ウェルナー・フォン・ブラウンは、月面着陸を目的とするアポロ計画の中心人物である。その功績を讃え、人類初の月面恒久都市にこの名が付けられた。フォン・ブラウン市は人類が初めて降り立った月面の表側“静かの海”に残されたアームストロングの足跡を中心として整備され、月面最大の恒久都市となった。この都市の郊外にA E社屈指の工場がある。



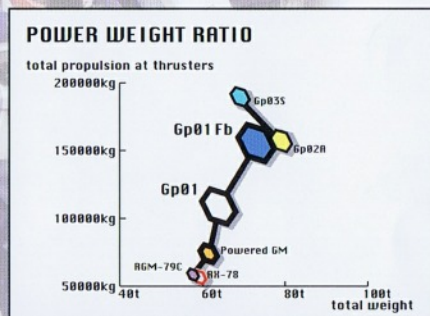
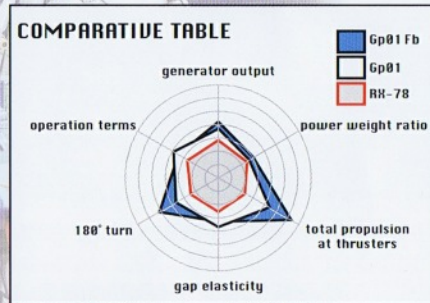




# RX-78 GP01Fb "Full burnern"

宇宙用コア・ファイターへの換装と、脚部のプロペラントタンクなどの追加装備によって、空間戦闘に対応するという比較的単純なものだった。ところが、機体が甚だしく損壊したため、単なる装備の換装だけではなく、逆に、地上におけるトライアルのデータのフィードバックに加え、ロールアウトからトライアル、そして損壊に至るまでの期間に提案されたアイデアなども盛り込むことが可能となったのである。こういった緊急の仕様変更は、いわゆる兵器開発を行うメーカーと軍の対応としては異例の事である。無論、実験機が実戦に巻き込まれる事自体が異常な事態ではあるが、この後に軍開発局による予算の獲得や配分、メーカーへの経済的補償など、実に様々な問題が噴出したであろうことは想像に難くない。そしてこのことが、潜在していた軍閥の暗躍や裏取引の材料とされたり、ましてや、連邦軍設立以来の慣例として部門や地域ごとにバラバラだった年度予算の複数の期間枠の統廃合や整理など、あたかも、この時期の一連の動乱が、組織活動の基本となる“盾”を変更したかのような財政改革が行われた時期と前後していることも、そういった憶測の余地を生んでいる。いわば、軍事的なスクランブルに劣らぬほどの“緊急動員”が経済的にも行われたのはほぼ確実なのである。実際、この“デラズ紛争※15”に関連する一連の事象がティターンズ設立の直接、間接的な契機となったことは広く知られている。ともあれ、かくして空間用MSとして特化されたGP01は当初の設計案とはかけ離れた機体となった。(制式ではなく)機体ナンバーがGP01Fbと変更されているのもそのためなのである(つまり、本来はFb仕様も含めてのGP01計画であったようだ)。Fb化に際してGP01が受けた改修点は、肩部のバーニアポッド及び背部のユニバーサル・ブースト・ポッドの増設と、脚部の構造変更である。特に脚部は、ほとんど当初の改装案に準じた改造が行われたのだが、形状が極端に異なるため、機体の印象を大幅に変えてしまっている。MSの構造の内、脚部は機体容積の過半数を占めており、MS-06RやMS-09R、MS-14などのように、巨大なバーニアユニットとして機能していた例は多く、脚部は大容量の燃料タンクでもあった。実際、GP01にしても、陸戦用であれば過剰な燃料積載はデッドウェイトとなるが、空間戦闘用MSであれば、脚部パーツはAMBAC機動※16においても重要な位置を占める。さらにプロペラントは可能な限り多く積載できるに越したことはない。そこで、機体稼働に支障が生じない範囲で最大限のペイロードを確保すべく、脚部の構造が極端に変更されているのである。基本フレームは、予備のものが、ほぼそのまま使用されている。そこに大型のプロペラントタンクが装備され、それに準じた脚部カバーが覆っている。さらに当時の標準的な艦艇の規格範囲内ギリギリで、足部ソールにまで増槽が装備されているのである。これらの構造は、“脚”や“腕”としての機能に支障がなければ、何を内装しても構わないはずだという発想を生み、後にジェネレーターを脚部に装

備するZ(ゼータ)ガンダム※17などの機体の誕生へと結びつくのである。無論、こういった“改装”あるいは“改良”を前提とした設計が施されていたのは、この機体がテストヘッドであったことが大きな理由ではあるが、いわゆる“連邦系”MSの次世代機の模索が行われていたことと無関係ではない。この時期、連邦系の量産型MSであるGM系の機体は、その基本的な規格を維持したままでの高性能化がほぼ限界に達しつつあった。そこで、『MSの高性能化』が求められていたわけだが、実際にはどの機能や構造を改善すれば“高性能化”といえるのか、が問われていたのである。実際、連邦軍が『最強のMS』を開発すべく推進しているこの『ガンダム開発計画』において、A E社は複数の解答を提示している。つまり“MSの強さ”には多様な側面がある、ということだ。それらのなかにおいて、GP01は最も本来的な“MS”を体現している機体だと言えるだろう。



Fb推進力試験

### 用語解説

※15 デラズ紛争  
宇宙世紀0083年に公国軍残党のエンジニア・デラズ率いるデラズ・フリートが引き起こした紛争のこと。デラズが展開する「星の筒作戦」により、連邦軍は多大な損害を被った。ある意味で戦後体制を決定づけた事件。宇宙世紀0100年頃までその実態は明らかになっていなかった。

※16 AMBAC機動  
Active Mass Balance Auto Control=能動的質量移動による姿勢制御のこと。MSは、腕や脚を動かすことで、その反作用を利用して姿勢制御を行い、燃料の消費を大幅に節約することができる。単なるデッドウェイトだと考えられた四本の腕と脚は、宇宙空間においてAMBACシステムとして有効に機能し、さらに人間の形を模したことで、近接戦闘にも非常に柔軟に対応できた。

※17 Z(ゼータ)ガンダム  
U.C.0086年にエゥーゴがZプロジェクトによって開発する可変試作MS。単独での大気圏突入能力と、MS単体としては屈指の攻撃力を持ち、既存の機体をはるかに超えるボンベンチャルを持つ画期的なMS。型式ナンバーはMSZ-006。後にパイオセンサーが搭載され、機体の追従性が飛躍的に向上する。





# コア・ファイターFF-XII

E.F.S.F. PROTOTYPE MULTIPURPOSE MOBILE SUIT RX-78 GP01

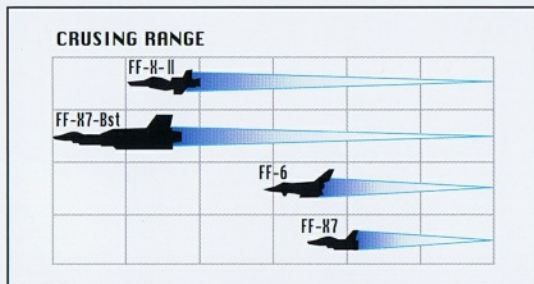
GUNDAM GP01/F6



FF-XII 飛行テスト

ガンダムのメインユニットおよび脱出用コア・ブロックとして採用されたFF-X7 コア・ファイターは、多用途軽戦闘機としての側面も持っていた。その変形システムプランは、“セイバーフィッシュ”※18 や“TINコッド”※19 などを開発したハービック社※20の提案によって決定した。このプランは、STOL（短距離離着陸）方式による艦載機の離着陸のノウハウからヒントを得たもので、MSへの換装は艦内を基本として行き、空間での換装には姿勢制御に各種スラスターを使用するというものだった。ただし、戦闘中の空中換装はきわめて危険度が高く、汎用性を広く求めた総合プランは、多少のテイクダウンを経て進行した。また、エンジンブロックに胴体をはさみこむようなスライド式プラットフォーム方式も提案されたが、飛行中の変形による失速も問題となり、机上のプランに終わった。GP01に採用されたFF-XII コア・ファイターIIIは、基本的に空中換装を想定しないこととされ、ドラムモジュールとして機体から独立したコックピットブロックが90度ロールした状態ではさみこまれるスライド式のプラットフォームが採用された。また、換装作業中、Bパーツ（下半身ブロック）は固定されていることが運用条件とされた。“ガンダム”を開発した「V作戦」※21は、“未知の可能性を持つ新兵器MS”の運用によって想定される“あらゆる状況”に対応する必要から、母艦となる強襲揚陸艦※22や特殊輸送機

※23などが“戦術システム”として並行して開発されたのである。“空中換装”自体、可能性としてプログラムはしてあったものの、手段としては非常にナンセンスなものであり、せいぜいが無重量空間における慣性飛行状態で行うものとされていた程度だったのだ。実際、戦後のシミュレーション結果からも、実戦において空中換装を行うことは正規の戦術としてリスクが大きすぎることが判明したため、GP01のコア・ファイターIIIは、A、Bパーツの空中換装を想定しない機体となった。そのため、航空機形態時の飛行ベクトルとMS形態時の機軸を一致させる必要がなくなり、機体レイアウトが大幅に変更されたのである。キャノピーは機体のコックピットハッチの真下に位置するため、ガンダムに比べて耐弾性も向上しており、インテークとメインジェネレーターブロックは胸部に収納され、エンジンブロックが背面に露出することで、全長が延長された。機体構造に十分な機能と装備を盛り込むことが可能となったのである。そのため、メインエンジンはMS形態時のメインスラスターとして流用できるほどの出力を獲得することができた。逆に言えば、コア・ファイターIIIは、MS一機を機動可能な程の出力を持つ航空機でもあるのだ。かくして、旧ハービック社の技術力が存分に投入されたGP01用のコア・ファイターIIIは、主ユニットを換装することにより、宇宙空間用戦闘機としての運用に加え、脱出専用のユニットとしては破格の航空戦闘能力を持つという驚異的な戦闘機となったのである。しかも、これらの仕様を達成した上で、この機体は“航空機”として非常に高い完成度を持っているのである。コア・ファイターIIで特筆されるのは、高度な空戦能力や速度を達成しながら、安定した飛行が可能であるという点だろう。元々、この機体に採用されるような前進翼は、翼端失速※24が発生せず、超音速領域での機動性も優れている。旧世紀中はダイバージェンス※25などの問題から本格的に発展、普及することはなかったが、ルナ・チタニ



## 用語解説

※18 **セイバーフィッシュ**  
コア・ファイター構想のなかで開発された空戦戦闘機。機体構造は通常の航空機と異なり、宇宙艦を縮小したといえるほどの多機能ぶりを有している。開発にあたっては、機体本体と並行して、コンフォーマルタンク式ブースターも製作された。元々は、ペガサス級に搭載する予定だったが計画自体が変更したため、おもにマゼラン級宇宙艦などの艦載機として実装計画された。型式番号はFF-S3。

※19 **TINコッド**  
高々度格闘戦闘機。コア・ファイター構想に基づくバリエーションのひとつで、局地防空戦闘用に開発された。形式番号はFF-6。空中戦能力は高いが、武装のバリエーションや航続距離に問題があった。

※20 **ハービック社**  
航空機メーカー。一年戦争終結後、戦艦の主役が高々度戦闘機からMSに移行したことにより、連邦軍からの新規発注が激減したため経営難に陥り、UIC.0082年6月にAE社に吸収合併されてしまう。そのAE社の航空機部門の開発スタッフが、GP01のコア・ブロック・システムの設計にも貢献したことはいうまでもない。

※21 **V作戦**  
一年戦争時、新型MSと、その母艦の開発、建造および運用、実戦投入、運用などを目的とした計画。それまでに進んでいたR×計画などを統合し、戦術システムとしての展開を考えた兵器体系を生み出すべく立案されたプロジェクト。ガンダムやホワイトベースなどを開発した。試作と量産工程が並立していたため、いくつかの先行量産機も生まれている。

※22 **強襲揚陸艦**  
V作戦によって連邦製MSの母艦として開発されたWB（ホワイトベース）に代表される特殊艦のこと。MSの運用を前提としつつ、宇宙艦や宇宙洋艦に準ずる攻撃力も併せ持つため、計画当初は“宇宙母艦”あるいは“宇宙攻撃空母”など、艦種や用途も定まらなかったが、最終的に強襲揚陸艦として登録された。

※23 **特殊輸送艦**  
WBが前部中央デッキに積載している運搬/回収用の航空機「ガンベリ」のこと。機体容積のほとんどがベイロードという構造で、100tを超える積載量を誇る。複数のMSを輸送および戦艦への投入が可能。機動性は決して高くはないが、オプションとして6基のミサイルを装備可能。





Scanned by www.plasticandplasters.com

# CORE FIGHTER FF-XII

ウム合金※26などをはじめとする軽量で堅牢な材料が開発されたため、機動性を損なうほどの重量増は無く、また、高度な機体管制システムの成熟などから、姿勢制御用スラスターの採用などによるダイバージェンスの予防など、航空力学的なトラブルをほぼ完璧に防げるようになったため、前進翼を採用することが可能となったのである。逆に、スラット(小翼)や前縁フラップ(下げ翼)などの複雑な機構を必要としない前進翼の方が、コア・ブロックへの変形を前提とするコア・ファイターIIには都合が良かったという側面もあったと言われている。しかも、その機体制御は特別な訓練を受けていないとも操縦が可能など簡便であったと言われており、MSのパイロットと旧世紀の戦闘機パイロットの養成事情の違いなども垣間見える。無論、これは感覚的、あるいは直感的な操作による操縦を可能とするパイロット支援システムによるものだという側面もあるだろうが、それも、この機体が当初から大気圏内と宇宙空間での運用を明確に区別していたからこそこのことであり、逆に、航空/航宙機でありながら、重力下仕様の際には「航空機」に特化できたため、「まるで20世紀初頭の複葉機のように操縦できた」とも考えられる。これは、旧ハービック社のスタッフが「航空機」メーカーとしての意地を見せた結果だと言っても過言ではない。まさにハービックの面目躍如と言えるだろう。同型機がアルピオン※27に複数配備されていたのは、実験用の予備というよりも、不足しがちな連邦軍の航空戦力調達へ向けてのデモンストレーションの意味もあったのではないかと、という噂も、あながち根拠のないものではない。かくも様々な思惑が交錯する同機ではあったが、デラズ・フリートとの交戦によってGPO1自体が大きな損傷を被り、さらには準戦時状態となった当時の状況から公式記録抹消に至る連邦軍内部のお家騒動に巻き込まれた同機の不運は察するに余りある。ともあれ、本来は主機の交換のみで対応可能であったはずの空間戦闘対応への仕様変更は、大規模な再設計を伴いつつ実施されることとなった。主な改造点は、航空用の空力装備の排除に始まり、メインジェネレーターの高出力化、ビーム・ガン/サーベルユニットのレイアウトの変更、熱核ジェット/ロケット※28から熱核ロケット※29への換装、リバース・スラスターの追加装備など、コックピットブロック以外はほとんど新造されたといっても過言ではない。また、プロペラントタンクを兼ねたユニバーサル・ブースト・ポッドの装備がもっとも特徴的な変

更点ではあるが、このポッド自体は当初からの宇宙用装備に織り込み済みのものであった。それよりもむしろ、機体前後部のジョイントが大幅な変更を受けた箇所だといえるだろう。この部位は、本来の設計案では、MS形態時、重力下仕様と同様に固定される予定だったが、コア・ブロックのカバーそのものが、脱出/換装時の障害となり得ることが判明したため、機体後部の強度を確保した上で、ブロック全体がフレキシブルに可動するように変更された。つまりエンジンブロック自体が、2個のジンバルを持つバーニアスラスターユニットとして機能するように改善されたのである。これによって、エンジンブロックはMS形態時にもボディとは独立して稼働することが可能となり、GPO1Fbは、当初の設計案に数倍する機動性を獲得することが可能となった。実戦データのフィードバックもあって、「空間戦闘」に対応すべく基本設計には手が加えられ、機体の前後を接続するジョイント部分の構造も抜本的に見直されることとなった。その変更によって、機体そのものの構造が堅牢となり、MS形態時、機体後部がフレキシブルに可動するようになった。また、ビーム・サーベルのホルダーは機体前部に移設され、両形態時により理想的なポジションをとることが可能となった。この機体が実際に航空戦闘機として運用されたかどうかは不明だが、実戦においては脱出力ペセルとして機能しなかった局面もあったらしく、その後、同型機の採用は見送られている。ただし、『ガンダム開発計画』そのものが連邦軍の公式記録からは抹消されているため、採用の見送りはそのせいであったとするのがもっとも有力な見解であるとされている。



バーニアノズル展開時



## CORE FIGHTER FF-XII Fb

### 用語解説

#### ※24 翼端失速

航空機が超音速を得るために開発された「後退翼」は、翼周の気流が外側に流れるため、翼端の境界層が厚くなる。すると翼端では気流が乱れ、揚力を発生させるはずの空気の流が翼面から剥がれてしまう。これが翼面失速で、機体はピッチアップ(機首が持ち上がる)などの危険な状態に陥る。これを防ぐため、後退翼機の翼は構造が複雑になってしまう傾向がある。

#### ※25 ダイバージェンス

前進翼は、気流が翼端から内側へ流れて失速しようとするが、胴体があるせいで気流は割れず、構造上「翼端失速」は起こらない。ただし、飛行中の空流と機体の引き起こしなど、進行方向に対して上向き角度を持った場合、翼の前方に上向き力が作用し翼は上方に「ひねられて」しまう。これがダイバージェンスで、翼に十分な強度が無いと、極端な場合、機体が空中分解してしまう。

#### ※26 ルナ・チタニウム合金

月に埋蔵されるチタンを原材料とする合金類の総称。ガンダムの「強さ」の秘訣とも言える装甲材などに使用されている。一年戦争終結後、アステロイドベルトの小惑星基地アクシズに逃げ延びた公国軍残党が、ガンダムに使用されたルナ・チタニウム合金を便宜上「ガンダリウム」と呼び、後にマテリアルや特性別にガンダリウムα、βを経てガンダリウムγを開発する。

#### ※27 アルピオン

U.C.0083年に就航したベガサス級強襲揚陸艦の母艦としてほぼ同時期に建造され、GPO1およびGPO2Aの重力下試験のため、同機を積載して地球に降下してきた。

#### ※28 熱核ジェット・ロケット

熱核ロケットエンジンの構造に加え、大気もプロペラントとして利用できるシステムのこと。大気圏内でも宇宙空間でも推力を得ることができるハイブリッドエンジンである。大気圏内での稼働に限定した熱核ジェットも存在する。ガンダムのコア・ファイターは、このタイプ。

#### ※29 熱核ロケット

ミノフスキー型の熱核反応炉が生み出す熱などを利用してプロペラントの燃焼を行う構造を持つロケットエンジンシステムのこと。化学反応ロケットのような酸化剤が不要であるため燃焼および積載に際しての効率が良い。装置全体の小型化も可能であるため、MSなどに多く採用されている。



# 兵装

E.F.S.F. PROTOTYPE MULTIPURPOSE MOBILE SUIT RX-78 GP01 GUNDAM GP01/Fb

GPシリーズに専用武装として供給あるいは調達された武装は、そのほとんどが既存の兵器に近いものか、あるいは進化の過渡期にあるものであった。エネルギーCAP※30システムを進化させたエネルギーバックや、GP03 デンドロビウム用に開発されたいくつかのフォールディング（折り畳み）ウエポンなど、コンセプト的には後に継続していたものも存在している。GPシリーズ自体の関連技術は封印されたものの、それらの機体が携行した兵器のほとんどは、軍事機密として規制されることはなかった。なぜなら、同時期の量産型MSなどが使用していたものの同等品か、更新された程度のもだったためである。

GP01の持つビームライフルは、一年戦争時からビーム兵器の開発に携わっていたボウワ社※31製のもので、その威力と精度には定評がある。また、この時点では共通の規格品とはなっていないが、エネルギーバック方式を採用したものであり、出力は1.5MW（メガワット）を確保している。Fbへの改装の際、内蔵デバイスが改良され、同型ながら性能が若干向上している。特徴は、「ジュッテ※32」と呼ばれる小型のビーム・サーベルをパレルの基部に装備していることで、ライフルを保持した状態のまま、敵の近接兵器を回避、防御することが可能となった。これは、中、長距離戦闘から即座に近接戦闘に対応可能な利便性の高い装備であったが、残念ながら後に採用している機体はほとんど見当たらない。ただし、エネルギーバック方式のコンセプトは次世代機にも受け継がれることになる。

シールドは、内周側の塗面にアンチ・ビーム・コーティング※33が施されており、2〜3度ならビーム砲の直撃もコート面が蒸散することにより防御することができるという。また、携行や移送などの場合の配慮として、全長を短縮できるよう設計されており、未使用時の慣性モーメントを多少は軽減できたようだ。

ビーム・サーベルは、コア・ファイターに装備されている状態でビーム・ガンとしても使用できるが、その威力は威嚇や攪乱以上には実効性がなく、実戦においては、ほとんど使い物にならないと言われていた。Fbへの改装により、主機のジェネレーター出力が向上したことに伴って、メーカーのA Eブラッシュ社※34は、かねて開発中だった改良

型と交換し、併せてホルダー部分の移設と改造を施し、射角を変更できるようにした上で、MS形態でもビーム・ガンとして使用可能とした。前のモデルが「実戦においてはほとんど使い物にならない」と言われていたことを考えれば、長足の進歩と言えるだろう。

本機は他に、同時期に運用されていた連邦系MSの標準兵器である90mmマシンガンも装備、運用していた。

「ガンダム開発計画」によって試作されたRX-78GP01をはじめとするタイプの異なる「ガンダム」カテゴリの「GPシリーズ」は、それぞれGP01がゼフィランサス、GP02がサイサリス、以下、デンドロビウム、ガーベラなどの花の名で呼ばれていた。連邦軍に対しては3タイプのカンダムが納入され、全て機体がデラーズ・フリートとの戦いにおいて実戦投入され、損壊している。その後、「星の屑作戦※35」に関連する事象そのものが連邦軍によって隠蔽されたため、公的には存在しない機体となっている。連邦軍内部でも、計画そのものが放棄された形で処理されており、連邦軍が核運用を前提とした兵器を開発していたというスキャンダルと、戦後最大規模のコロニー墜落事故の真相と共に、デラーズ紛争に関わる機密事項として公式記録から抹消されている。そのため、この計画によって開発された関連技術も、そのほとんどが軍事機密として封印されてしまい、ある時点まで転用も援用も不可能となってしまったのである。

実際には、ガンダム開発計画そのものが正規の予算を獲得していたものではなかったため、連邦政府の監査機関から査察が入るようなことはなかったものの、ガンダム開発計画の挫折は、連邦軍内部に秘密兵器開発の民間委託という方針に危機管理や情報統制上の問題点があることを露呈させてしまったのである。無論、量産機の生産などの民間委託はある程度継続されたが、U.C.0083年以降からある時期まで、MSの新規開発は基本的に連邦軍主導で行われるようになった。

とはいえ、特にMSの携行武装などは、すでに基本的な特許などが公開されていたものも多く、関連技術のすべてを覆い隠す事は事実上不可能であったため、書類上の操作で処理されていたものもあったようだ。

しかし、ガンダム開発計画の一方の主体であったA E社は、連邦軍の指定する機密を漏洩させた場合、あるいは、その技術を使用したMSなどを連邦軍に先行して公にした場合、大変な違約金を徴収されることとなった。のみならず、連邦政府との関係も悪化しかねない。A E社は連邦軍が提示した



**MACHINE GUN**  
HFV-GMG・MG79-90mm

## 用語解説

### ※30 エネルギーCAP

メガ粒子を縮退寸前の状態で蓄積する技術のこと。これによって連邦軍は、一年戦争当時、戦艦でなければ搭載できなかったメガ粒子砲をビーム・ライフルのサイズまで小型化し、ガンダムなどのMSの主武装とすることに成功した。メガ粒子砲はエネルギーの変換効率が高く、当時のレーザー砲の四倍以上の性能を持ち、荷電粒子砲と比較して地磁気などの影響を受けにくいという利点がある。

### ※31 ボウワ社

連邦軍のビーム兵器開発において主導的な役割を演じた企業。メガ粒子砲の小型化に際し、エネルギーCAPシステムの理論確立に大いに貢献した。GP01に採用されたビーム・ライフルなども生産しており、ジュッテデバイスの提案と実装もボウワが行ったと言われている。

### ※32 ジュッテ

江戸時代に捕吏が持っていた道具。長さ45〜50cmほどの鉄棒で、手もと近くに鉤があり、刀剣による斬撃を防ぐ。秘密には「じゅつて」と読む。GP01およびGP03の専用ビーム・ライフルのパレル下部には、敵のビーム・サーベルを防御するため特殊なビーム刃を発生するデバイスが据えられており、それが形成するビームの形状と機能が「十手」に類似しているためこう呼ばれる。

### ※33 アンチ・ビーム・コーティング

メガ粒子砲の持つ高エネルギーを蒸散、減免する効果のある塗料や素材が使われているものや領域のこと。ビームを反射、拡散させるビーム・バリアとして機能する1（アイ）フィールド・ジェネレーターなどに比べ効果は薄い。安価な上それなりに有効であるため、最終装甲やシールドなどの防衛装備に施されることが多い。

### ※34 A Eブラッシュ社

業務用レーザー発振機を開発していたブラッシュ社をA E社が買収し設立した。メガ粒子砲やビーム・サーベルなどの発振デバイスおよびコンデンサー、ボンピングシステム部材の開発、製造、販売および供給のほか、アッセンブル後の調整やチューンなども請け負っていた。







## BEAM RIFLE

XBR-BOWA M-82-05H/06A

条件を承伏するしかなかった。連邦軍という最大の顧客を確保するためには、それ以外の選択肢は存在しなかったのである。その意味で、A E社も、星の肩作戦の被害者だったと言うこともできるだろう。しかも、GPシリーズ開発のための膨大な投資は、ほとんど回収できないままであったと言われている。しかし、MS関連技術のうち、特に武装関係の関連技術は、月企業連合体※36をはじめとする経済界などによるロビー活動※37の甲斐もあって、特に機密度の高いものでない限り、制限されることは無かったようだ。

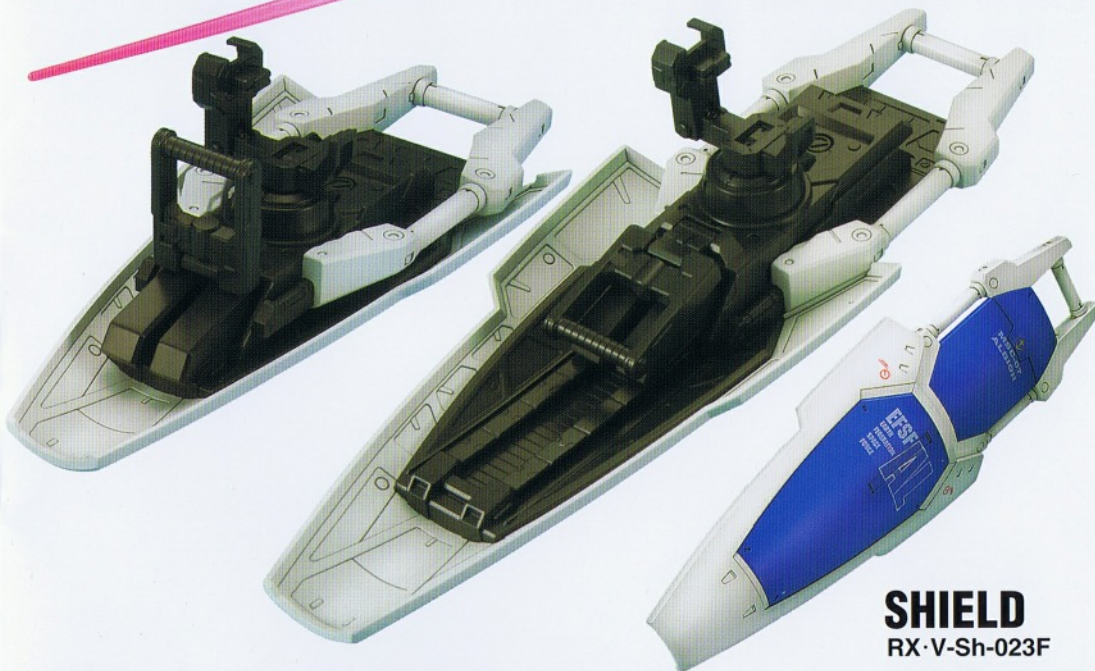
ちなみに、GP01の別名「ゼフィランサス」はA E社の開発部門が付けたある種のコードネームである。意味は「タマスダレ」のことで、花言葉は「期待」または「純白の愛」「清い愛」だという。



ビーム・ライフルメンテナンス時

## BEAM SABER

A.E.Blash-XB-G-06 (07) /Du.02 (05)



## SHIELD

RX-V-Sh-023F

### 用語解説

※35 星の肩作戦  
U.C.0083年にデラース・フリートが実行した反抗作戦。連邦軍の機密プロジェクトであるガンダム開発計画やコロニー移送計画を利用し、一年戦争時と比較して圧倒的に少数規模の戦力でコロニー落としを敢行した。しかし、この事件は長い間、秘匿されコロニー落としもコロニー公社の輸送ミスでの落着きとして処理されていた。この時の事件への対応を巡って連邦軍内部の勢力図が一変し、ティターンズ設立のほぼ直接的な要因となった。

※36 月企業連合体  
主に月面の恒久都市などに拠点を持つ企業による地球圏屈指の経済団体。政財界に対して大きな発言力を持ち、連邦政府に対しても活発なロビー活動などを展開している。

※37 ロビー活動  
一般にはホテルや劇場の入り口にある広間やホール、議会の控室などのことだが、転じて、議員に対して行う陳情や、その活動をする人々や圧力団体のことを指すようになった。議員が院外者と面会するロビーをおもな舞台として、特定の団体の利益のために議会に働きかけ、請願や陳情を仲介する院外運動団体の運動員などのことを「ロビイスト」と呼ぶ。







U.C.0099  
宇宙世紀のジャーナル誌!!

Anaheim Journal  
【アナハイム・ジャーナル】

フォンブラウン〜地球2極編集!!  
宇宙世紀最大のMSメーカー、  
アナハイムエレクトロニクス社の全貌を一挙公開!!

Winter on Sale!





0083年から16年後 . . . . .

# 0099年の大スcoop!!

## AE released having made the innovative model

私の手元に、MSが写された数点の写真がある。日付はすべてU.C.0083年のものだ。

今から16年前のU.C.0083年——人類の半数を死に至らしめた未曾有の大戦乱、一年戦争が終結して3年。地球圏が目覚しい復興を遂げつつあった時期であると同時に、北米大陸へのコロニー落下という事故が発生し、ティターンズが結成された年でもあった。復興、社会不安、そして地球圏を再び戦乱へと導く軍靴の音が聞こえ始めた年、それがU.C.0083年の印象である。

私事で恐縮だが、U.C.0083年当時、私はアナハイム・エレクトロニクス（編注：以下AE）の航空技術部に勤めていた。一年戦争当時、フォン・ブラウン市立大学の大学院生だった私は、MSの驚異的性能を知り衝撃を受けた。MSに携わる仕事に就きたいと思うようになった私は、戦後、MS産業部門を設立したAEに入社し、フォン・ブラウン支社に配属されることになった（残念ながらMS部門には編入されなかったが）。

そしてU.C.0083年初頭、AEの一部にある噂が流れた。それはMS部門がまったく前例のない新機軸MSを開発しているというものだった。AEがMSを開発する——それは革命的なことといえた。当時、AEは完全新設計のMSなど開発したことなどなかったからだ。気になった私は、MS部門で働く友人にその噂について尋ねたことがあったが、彼は「今、面白いことをやっている。それ以上は言えないよ」と否定も肯定もしなかった。

その後、私が仕事に忙殺されていたことや異動があったこともあり、その噂について詳しく聞く機会を逸してしまった。また、U.C.0084年にRMS-106ハイザックが発表されたこともあって、当時は「U.C.0083年の噂＝ハイザック」であると漠然と思い込んでいた。

月日は流れU.C.0080年代末、MS研究者を悩ませる問題が発生していた。U.C.0087年頃、第2世代MSや可変MSなどの爆発的進化を遂げたMSであるが、関連技術の出現があまりに唐突で、それ以前のMSとの間に埋めきれない（溝＝ミッシングリンク）が存在するということがあった。

その頃、AEを退社し、文筆業の真似事を始めていた私も、“MSのミッシングリンク”の謎に挑んだひとりであった。そんな私の頭をよぎったのは、例のU.C.0083年

の噂だった。噂になったMSはハイザックのことではない、と確信したまではいいが、AEを辞したばかりの私には調査手段は少なく、真相にたどり着くことはできなかった。

“ミッシングリンク”が様々な推論を呼ぶようになって10年近くが経過した先日、AEからある資料——本文冒頭で語ったMSのフォトもその一部だ——が公開された。資料はたった数ページのものであったが、その内容はすべてのMS研究者を驚嘆させるに足るものであった。

『U.C.0083年度試作MS群』に関して——そう題された資料は、「U.C.0084年までAEは完全オリジナルのMSを完成させ得なかった」という説を覆すだけでなく、添付された写真には明かにその後のMSに影響を与えたとと思われる技術が散見された。これらの資料の開示により“MSのミッシングリンク”の謎が解明される可能性が極めて高くなっているのだ。

資料公開後、私は幸運にも試作MS群に関した人々に取材する機会を得た。そこで私は新たな衝撃を受けた。それは試作MS群の先進性や、MS開発系譜における重要性だけではない。

『アナハイム・ジャーナル通巻100号＝25周年記念号』では、今回おこなった一連の取材で見えてきた、試作MS群が“MS産業史”で果たした役割、そして今後のAE製MSについて紹介する予定である。

（文責＝アート・A・アーデン）

<著者解説>

**アート・A・アーデン**

ノンフィクション・ライター。U.C.0056年サイド6生まれ。フォン・ブラウン市立大学機械工学部卒業後、AEフォン・ブラウン、同グラナダ勤務を経て独立、文筆業へ。執筆範囲は、科学、歴史・文化、社会問題など幅広い。U.C.0094年、『文明の軌』(アナハイム・パブリッシング)で第11回グリーネマイヤー賞を受賞。近著に『主戦論への愚札』(ローサイズ出版)、『モビル・スーツ・ネクスト・シークエンス』(十翼社)、『宇宙世紀・六つの論点』(アナハイム・パブリッシング)がある。



# カラーガイド、マーク指定位置

## RX-78 GP-01 GUNDAM GP01/Fb Coloring

※下のフォトに指示の無いシールは完成写真を参考に、好みの場所に貼ってください。  
※○数字は、シールの番号です。

E.F.S.F. PROTOTYPE MULTIPURPOSE MOBILE SUIT RX-78 GP01 GUNDAM GP01/Fb



### RX-78 GP01

### CORE FIGHTER FF-XII





\*曲面等へはりこむ場合には、  
切り込みを入れるとよいでしょう。



RX-78 GP01Fb



CORE FIGHTER FF-XII Fb

## マークガイド

- 

連邦軍のベガス級強襲揚陸艦アルビオンのエンブレム。
- 

オーストラリアのトリントン基地のエンブレム。
- 

日用品から軍事兵器まで手掛ける巨大複合企業アナハイム・エレクトロニクス社のシンボルマーク。
- 

胸部エアインテークの冷却システムに関する整備上の警告表示。
- 

外装をマウントする特殊ボルトの位置を示す。
- 

アンバックシステムの荷重移動ブロックを示す。
- 

整備時にこの上に乗らないための警告表記。
- 

非常時にコックピットハッチを強制解放するためのスイッチ。
- 

整備時の検査項目に関する注意表記。
- 

カタパルト射出の際、射出圧力を決定するためのデータを記入するスペース。

## GP01指定色

- 

本体等ホワイト部分の塗装色  
ホワイト(100%) + デイトナグリーン少量 + ブラック少量
- 

胸部等ブルー部分の塗装色  
コバルトブルー(60%) + ホワイト(30%) + インディブルー(10%)
- 

インテーク部等イエロー部分の塗装色  
イエロー(50%) + ホワイト(30%) + オレンジイエロー(20%)
- 

関節等ダークグレー部分の塗装色  
ミッドナイトブルー(100%)
- 

ツマ先等レッド部分の塗装色  
レッド(100%)
- 

後頭部センサー等  
クリアグリーン部分の塗装色  
クリアグリーン(100%)
- 

ビームライフルセンサー等  
クリアレッド部分の塗装色  
クリアレッド(100%)
- 

メンテナンスハンガー、グレー部分の塗装色  
ニュートラルグレー(70%) + ブラック(30%)

COLOR GUIDE, MARK LOCATION





# PERFECT GRADE

**RX-78 GP01 GUNDAM GP01/Fb**

Ver.1.0